

## 独占栽培，昨年期限切れ

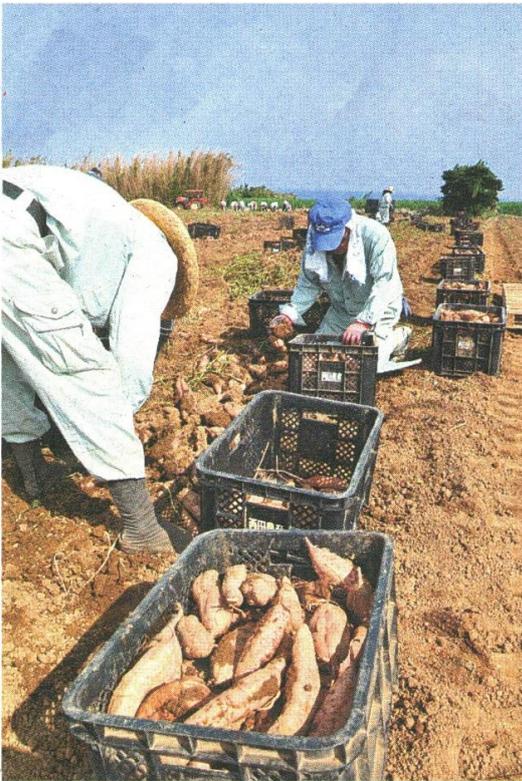
# 種子島安納いも正念場

種子島特産の安納いもの僅産拡大がとどまるところを知らない。2013年は1万トンの大台を初めて突破，販売額（青果用，キロ平均単価180円）も約23億円と過去最高になった。一方，種苗法に基づき，苗の栽培・販売を島内で015年間独占できた育成者権は13年秋で切れ，島外各地で参入が相次ぐ。他産地と初めて競合する14年の本格出荷が間もなく始まり，正念場を迎える。

## 今秋から島外産と競合



収穫期を迎えた安納いも。作柄は上々という



|| 西之表市現和

安納いも（安納紅，安納こがね）は，濃厚な甘さとねっとりした食感で約10年前にブームが起こり，今や全国区の人気を誇る。種子島3市町で07年以降，栽培面積5.1倍，生産量7.6倍，販売額9.3倍と右肩上がりの成長を続ける。

販売額には焼き芋や菓子，ペーストといった加工品は含まれていない。関連商品の裾野が広く，地域経済への波及効果は大きい。まさに島の宝といえる。

### ■ライバル

串間市のくしまアオイファームは14年春，安納紅のウイルスフリー苗を200畝で植え付けた。「べにはるか」「シルクスweet」を主力に5品種のサツマイモ栽培を手掛け，鹿児島県内スーパーでも販売する。

池田誠社長（44）は「種子島産の安納いものブランドカや価格は別格とはいえ，供給が需要にまだまだ追いついていないのが現状。参入の余地があり，今回初めて試験的に取り組んだ」と説明する。

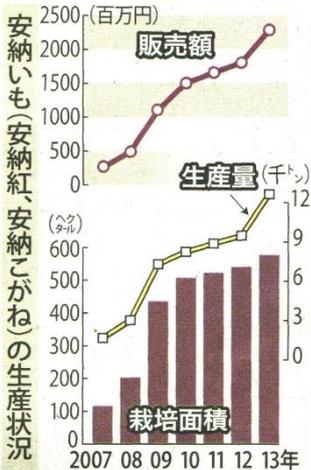
今春以降，全国の同業者も安納いもの栽培を始めたとの話を耳にするといい，ライバルとの競合を実感。「収量や品質が向上するウイルスフリー苗がどこでも出回っており，今後新たな品種が生まれる可能性もあり得る」と指摘した。

### ■ばらつき

行政やJA，生産者らでつくる「安納いもブランド推進本部」は9月に入り，14年産の糖度検査を始めた。畑20畝ごとに抽出した芋5個を蒸して糖度を測り，全て合格したらその畑の芋をブランド認定する。

厳しい品質基準を設けているものの，「どうしても甘さにばらつきが出る」（関係者）のは否めない。全量検査などより精度の高い検査態勢を目指して模索を続ける。

一方，しっとりした口当たりと甘さで近年人気が高い「べにはるか」。外観や味の優れた品種を交配，選抜して07年に品種登録された。鹿児島県熊毛支庁農政普及課の梶原雄二課長（60）は「場所や土壌を選ばず栽培しやすい。何より糖度のばらつきが



少なく、安納いもにとって脅威だ」と強調する。

ブランド推進本部生産販売部の西田春樹会長（60）は、生産者のさらなる意識改革と品質管理が欠かせないと訴える。「ここ1、2年が勝負。危機感を共有して取り組まなければ、他品種に駆逐されてしまう」と力を込めた。（山下悟）

## Q 育成者権と安納いも

ズーム

種苗法に基づく農林水産物の知的財産権。国に登録された新品種の開発・育成者が一定期間、苗の栽培や販売を独占できる。鹿児島県は、西之表市安納地区を中心に自家用栽培されてきた在来種の選抜を重ねて育種。安納いもとして「安納紅」「安納こがね」の2品種が1998年10月に登録された。種子島以外での栽培や販売を認めなかったが、2013年10月29日に有効期限切れとなった。

平成26年9月26日（金）／南日本新聞